



地人館
E-books

デモ版 pdf

賢治は笑える
愉快な童話集

宮沢賢治コミカル童話選 II

大角 修 編著



はじめに ユーモラスな宮沢賢治

宮沢賢治（1896～1933年）は「雨ニモマケズ」の印象とは異なり、実際には、ジョーク好きで、ほがらかな人だったようである。作品にもユーモラスなものが多い。有名な童話「銀河鉄道の夜」にも、プリオシン海岸の化石掘りの大学生とか、銀河の鳥捕りとか、けったいな人物が登場する。なかでもユーモラスな作品を集めたのが本書である。コミカルともいえる作品群なので、書名を『コミカル童話選』とした。

賢治作品がユーモラスであることは早くから指摘されていて「宮沢賢治のユーモア」といった論もあるのだが、ともかく、作品を読んでみるのがいちばんである。

しかし、もう百年も前に書かれた作品なので、今ではわかりにくくなった語句も多い。また、賢治自身が謎めいた言葉を散りばめて、そこから展開するイメージは読者にゆだねているところがある。それも今の読者にはわかりにくい。賢治の作品に興味をもって読もうとする人は多いのだが、そうした点が壁になって、読みにくいし、読んでも何のことかわからなかったという人もある。

そこで本書では、現代表記に改められている「宮沢賢治コレクション」シリーズを用いたうえ、

作品の本文を区切ってコメントを挿入した。作品の途中に入れたコメントを煩わしいと感じる方もおられると想像されるが、ひとつの試みとしてご容赦いただきたい。

ともあれ賢治のユーモラスな作品を楽しんでいただき、その作品の全体を読むことを通して、単にコミカルだけではないところも味わっていただければ幸いである。

【目次】より

よく利く薬とえらい薬 ❖野バラの実の話

「ツエ」ねずみ ❖暴露する者の末路

鳥箱先生とフウねずみ ❖虚妄の果てに

クンねずみ ❖ネズミは猫に食われる

とつこべとら子 ❖狐に化かされた話

蜘蛛となめくじと狸 ❖ゴールは地獄だ

おわりに 宮沢賢治の文学と信仰

以下は「I」所収

はじめに ユーモラスな宮沢賢治

山男の四月 ❖ 「こころの種子」はどこに？

紫紺染について ❖ 東京大博覧会受賞秘話

北守将軍と三人兄弟の医者 ❖ 北方守備軍ソンバーユー将軍の帰還

フランドン農学校の豚 ❖ 友愛と平和の情操を涵養するために

どんぐりと山猫 ❖ 森の中の草地の思い出

おわりに いつか秋の日に

蜘蛛となめくじと狸 ◆ゴールは地獄だ

この作品については「新校本宮澤賢治全集」「年譜篇」（筑摩書房）の大正7年（1918）8月の項に次のようにある。賢治が22歳の年である。

*

宮沢清六（賢治の弟）の「兄賢治の生涯」によれば、この夏童話「蜘蛛となめくじと狸」「双子の星」を読んで聞かせられたことをその口調まではっきりおぼえているとあり、「処女作の童話を、まさきにも家族に読んできかせた得意さは察するに余りあるもので、赤黒く日焼けした顔を輝かし、目をきらきらさせながら、これからの人生にどんな素晴らしいことが待っているかを予期していたような当時の兄が見えるようである。」という。これに従えば、この時期から童話の創作がはじめられたことになる。

*

ということでは、「新校本宮澤賢治全集」では童話篇の冒頭に置かれているのが「蜘蛛となめくじ

と狸」である。

蜘蛛と、銀色のなめくじとそれから顔を洗ったことのない狸とはみんな立派な選手でした。けれど一体何の選手だったのか私はよく知りません。

山猫が申しましたが三人はそれはそれは実に本気の競争をしていたのだそうです。

一体何の競争をしていたのか、私は三人がならんでかける所も見ませんし学校の試験で一番二番三番ときめられたことも聞きません。

一体何の競争をしていたのでしょうか、蜘蛛は手も足も赤くて長く、胸には「ナンペ」と書いた蜘蛛文字のマークをつけていましたしなめくじはいつも銀いろのゴムの靴をはいていました。又また狸は少しこわれてはいましたが運動シャツポをかぶっていました。

けれどもとにかく三人とも死にました。

蜘蛛は蜘蛛暦くもれき三千八百年の五月に没なくなり銀色のなめくじがその次の年、狸が又その次の年死にました。三人の伝記をすこしよく調べて見ましよう。

「蜘蛛暦」はクモの世界の暦で、クモの神武天皇即位の年かクモのキリスト生誕の年から数えて三千八百年のことである。ナメクジにはナメクジ暦、狸には狸暦があるのだろうが、この物語は蜘蛛暦で進む。

一、赤い手長の蜘蛛

蜘蛛の伝記のわかつているのは、おしまいの一ケ年間だけです。

蜘蛛は森の入口の檜なちの木に、どこからかある晩、ふつと風に飛ばされて来てひつかかりました。蜘蛛はひもじいのを我慢して、早速お月様の光をさいわいに、網をかけはじめました。

あんまりひもじくておなかの中にはもう糸がない位でした。けれども蜘蛛は

「うんどこせうんどこせ」と云いながら、一生けん命糸をたぐり出して、それはそれは小さな二銭銅貨位の網をかけました。

夜あけごろ、遠くから蚊がくうんとうなつてやって来て網につきあたりました。けれどもあんまりひもじいときかけた網なので、糸に少しもねばりがなくて、蚊はすぐ糸を切つて飛んで行くうとしました。

蜘蛛はまるできちがいのように、葉のかけから飛び出してむんずと蚊に食いつきました。

蚊は「ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。」と哀れな声で泣きましたが、蜘蛛は物も云わずに頭から羽からあしまで、みんな食つてしまいました。そしてホツと息をついてしばらくそらを向いて腹をこすつてから、又少し糸をはきました。そして網がひと一まわり大きくなりました。

そして葉のかげに戻って、六つの眼をギラギラ光らせてじつと網をみつめて居おりました。

一年前、蜘蛛はまだ小さくて巢も弱々しく、蚊を一匹つかまえるのもやっとだった。しかし、この蜘蛛は言葉が巧みで、近寄る虫どもをうまくひっかけ、ぐんぐん大きくなっていく。

「ここはどこでござりまするな。」と云いながらめくらのかげろうが杖をついてやって参りました。

「ここは宿屋ですよ。」と蜘蛛が六つの眼を別々にパチパチさせて云いました。

かげろうはやれやれというように、巢へ腰をかけました。蜘蛛は走って出ました。そして「さあ、お茶をおあがりなさい。」と云いながらかげろうの胸どうなか中にむんずと囓かみつきました。

かげろうはお茶をとりょうとして出した手を空にあげて、バタバタもがきながら、

「あわれやむすめ、父親が、

旅で果てたと聞いたなら」

と哀れな声で歌い出しました。

「えい。やかましい。じたばたするな。」と蜘蛛が云いました。するとかげろうは手を合せて

「お慈悲でございます。遺言のあいだ、ほんのしばらくお待ちなされて下されませ。」とねがいました。

蜘蛛もすこし哀れになって「よし早くやれ。」といつてかげろうの足をつかんで待っていました。かげろうはほんとうにあわれな細い声ではじめから歌い直しました。

「あわれやむすめちちおやが、

旅ではたと聞いたなら、

ちさいあの手しりてうに白手甲、

いとじがんれ巡礼の雨とかぜ。

もうしみようご冥加がご報謝と、

かどなみなみに立つとても、

非道の蜘蛛の網ざしき、

さわるまいぞや。よるまいぞ。」

「小しやくなことを。」と蜘蛛はただ一息に、かげろうを食い殺してしまいました。そしてしばらくそらを向いて、腹をこすつてからちよつと眼をぱちぱちさせて

「小しやくなことを言うまいぞ。」とふざけたように歌いながら又糸をはきました。

かげろうは昆虫の一種で、幼虫は川で育ち、羽化すると数日で死んでしまう。命のはかなさの喩たとえとして語られてきた。ここでは蜘蛛につかまつたかげろうが娘に遺言の歌をうたう。

自分が旅で死んだと聞いたなら、娘は巡礼に出るだろう。人形浄瑠璃『傾城阿波鳴門』のおつる

のように、白手甲の小さな手で鈴をチリンチリンと鳴らして「申しご冥加ご報酬」と門付けしながら歩いて行く。「かどなみなみに立つとても（どんなに多く家々の門に立つても）」、蜘蛛の網座敷には近寄るな。さわるまいぞや。よるまいぞ。

このように哀れに歌ったかげろうを蜘蛛は「小しやくなことを」と一気に食い殺してしまった。

網は三まわり大きくなって、もう立派な蜘蛛の巣です。蜘蛛はすっかり安心して、又葉^{また}のかけにかくれました。その時下の方でいい声で歌うのをききました。

「赤いてながのくうも、

天のちかくをはいまわり、

スルスル光のいとをはき、

きいらりきいらり巣をかける。」

見るとそれはきれいな女の蜘蛛でした。

「ここへおいで。」と手長の蜘蛛が云って糸を一本すうつとさげてやりました。

大きくなった蜘蛛は手も赤く長く伸び、胸の「ナンペ」のマークも鮮やかだ。成長した雄蜘蛛の魅惑的な性徴なのだろう。そのとき、巣の下のほうから美女の蜘蛛の恋の歌さえ聞こえてきたので、糸を一本、下げてやったのだ。

女の蜘蛛がすぐそれにつかまつてのぼつて来ました。そして二人は夫婦になりました。網には毎日沢山食べるものがかりましたのでおかみさんの蜘蛛は、それを沢山たべてみんな子供にしてしまいました。そこで子供が沢山生まれました。ところがその子供らはあんまり小さくてまるでずきとおる位です。

子供らは網の上ですべつたり、相撲をとつたり、ぶらんこをやつたり、それはそれはにぎやかです。おまけにある日とんぼが来て今度蜘蛛を虫けら会の相談役にするというみんなの決議をつたえました。

ある日夫婦のくもは、葉のかげにかくれてお茶をのんでいますと、下の方でへらへらした声で歌うものがあります。

「ああかい手ながのくうも、

できたむすこは二百疋、

めくそ、はんかけ、蚊のなみだ、

大きいところで稗ひえのつぶ。」

見るとそれは大きな銀色のなめくじでした。

蜘蛛のおかみさんはくやしがつて、まるで火がついたように泣きました。けれども手長の蜘蛛は云いました。

「ふん。あいつはちかごろ、おれをねたんでるんだ。やい、なめくじ。おれは今度は虫けら会の相談役になるんだぞ。へっ。くやしいか。へっ。てまえなんかいくらからだばかりふとつても、こんなことはできない。へっへっ。」

なめくじはあんまりくやくして、しばらく熱病になって、

「うう、くもめ、よくもぶじよくしたな。うう。くもめ。」といていました。

網は時々風にやぶれたりごろつきのかぶとむしにこわされたりしましたけれどもくもめはすぐすうすう糸をはいて修繕しました。

二百疋の子供は百九十八疋まで蟻に連れて行かれたり、行衛不明になったり、赤痢せきりにかかったりして死んでしまいました。

けれども子供らは、どれもあんまりお互いに似ていましたので、親ぐもはずぐ忘れてしまいました。

そして今はもう網はすばらしいものです。虫がどんどんひっかかります。

二百匹も子どもを生んだといつても、蜘蛛の子は小さい。「めくそ、はんかけ、蚊のなみだ、大きいところで稗のつぶ」となめくじがからかった。今や虫けら会の相談役に就任するに至った蜘蛛は、それをなめくじに言つて、「へっ。くやしいか。へっ、おまえなんか「こんなことはできない。へっへっ」とやり返した。

そうしてみると、何かの競争をしているというのは、威張りつこの競争らしい。二百足の子はほとんど死んで二匹しか残らなくても、そこは蜘蛛のことだから気にしない。蜘蛛はカプトムシに網を壊されたりしても、ただちに修理して虫をどんどんひっつけた。しかし、それが恐怖の競争であることにはまだ気づいていない。

ある日夫婦の蜘蛛は、葉のかげにかくれてお茶をのんでいますと、一足の旅の蚊がこつちへ飛んで来て、それから網を見てあわてて飛び戻って行きました。

すると下の方で

「ワツハツハ。」と笑う声がしてそれから太い声で歌うのが聞えました。

「ああかいてながのくうも、

あんまり網がまずいので、

八千二百里旅の蚊も、

くうんとうなつてまわれ右。」

見るとそれは顔を洗ったことのない狸でした。蜘蛛はキリキリキリッとはがみをして云いました。
た。

「何を。狸め。一生のうちにはきつとおれにおじぎをさせて見せるぞ。」

それからは蜘蛛は、もう一生けん命であちこちに十も網をかけたたり、夜も見はりをしたりしま

した。ところが困ったことは腐敗したのです。食物がずんずんたまって、腐敗したのです。そして蜘蛛の夫婦と子供にそれがうつりました。そこで四人は足のさきからだんだん腐れてべとべとなり、ある日とうとう雨に流れてしまいました。

それは蜘蛛暦三千八百年の五月の事です。

こうして蜘蛛は無惨な最期を遂げた。次に、なめくじは？ 話は一年前、蜘蛛が最初の巣をかけた頃にさかのぼる。

二、銀色のなめくじ

丁度蜘蛛が林の入口の檜の木に、二銭銅貨の位の網をかけた頃、銀色のなめくじの立派なおうちへかたつむりがやって参りました。

その頃なめくじは林の中では一番親切だという評判でした。かたつむりは「なめくじさん。今度は私もすっかり困ってしまいましたよ。まるで食べるものはなし、水はなし、すこしばかりお前さんのためであるふきのつゆを呉れませんか。」と云いました。

ナメクジとカタツムリは陸生の巻き貝の一種である。殻が退化したナメクジは樹の根元や石の下のなどのじめじめしたところにいる。その水気はナメクジが勤勉にも露の露をためたものだという。

しかも、林の中では一番親切だという評判だ。ところが、その親切は畏である。

するとなめくじが云いました。

「あげますともあげますとも。さあ、おあがりなさい。」

「ああありがとうございます。助かります。」と云いながらかたつむりはふきのつゆをどくどくのみました。

「もつとおあがりなさい。あなたと私とは云わば兄弟。ハッハハ。さあ、さあ、もしおあがりなさい。」となめくじが云いました。

「そんならも少しいたできます。ああありがとうございます。」と云いながらかたつむりはもしののみました。

「かたつむりさん。気分がよくなったら一つ相撲をとりましようか。ハッハハ。久しぶりです。」となめくじが云いました。

「おなかですいて力がありません。」とかたつむりが云いました。

「そんならたべ物をあげましよう。さあ、おあがりなさい。」となめくじはあざみの芽やなんか出しました。

「ありがとうございます。それではいただきます。」といいながらかたつむりはそれを喰べました。「さあ、すもうをとりましよう。ハッハハ。」となめくじがもう立ちあがりました。かたつむり

も仕方なく、

「私わたしはどうも弱いのですから強く投げないで下さい。」と云いながら立ちあがりました。

「よっしょ。そら。ハッハハ。」かたつむりはひどく投げつけられました。

「もう一ぺんやりましょう。ハッハハ。」

「もうつかれてだめです。」

「まあもう一ぺんやりましょうよ。ハッハハ。よっしょ。そら。ハッハハ。」かたつむりはひどく投げつけられました。

「もう一ぺんやりましょう。ハッハハ。」

「もうだめです。」

「まあもう一ぺんやりましょうよ。ハッハハ。よっしょ。そら。ハッハハ。」かたつむりはひどく投げつけられました。

「もう一ぺんやりましょう。ハッハハ。」

「もうだめ。」

「まあもう一ぺんやりましょうよ。ハッハハ。よっしょ。そら。ハッハハ。」かたつむりはひどく投げつけられました。

「もう一ぺんやりましょう。ハッハハ。」

「もう死にます。さよなら。」

「まあもう一ぺんやりましょうよ。ハッハハ。さあ。お立ちなさい。起こしてあげましょう。よつしよ。そら。へっへっへ。」かたつむりは死んでしまいました。そこで銀色のなめくじはかたつむりをペロリと喰べてしまいました。

ナメクジとカタツムリが相撲をとるといふのは奇体な空想だ。ナメクジは強く、「もう一ぺんやりましょう。ハッハハ」と相手が死ぬまで強要して食べてしまう。「ハッハハ」「ハッハハ」と笑いながら捕食する肉食系ナメクジだ。

それから一ヶ月ばかりたつて、とかげがなめくじの立派なおうちへびつこをひいて来ました。そして「なめくじさん。今日は。お薬を少し呉れませんか。」と云いました。

「どうしたのです。」となめくじは笑つて聞きました。

「へびに噛かまれたのです。」ととかげが云いました。

「そんならわけはありません。私わたしが一寸ちよつとそこを嘗なめてあげましょう。なあにすぐなおりますよ。ハッハハ。」となめくじは笑つて云いました。

「どうかお願い申します。」ととかげは足を出しました。

「ええ。よござんすとも。私わたしとあなたとは云わば兄弟。ハッハハ。」となめくじは云いました。

そしてなめくじはとかげの傷に口をあてました。

「ありがとうございます。なめくじさん。」ととかげは云いました。

「も少しくよく嘗めないかとで大変ですよ。今度又来てももう直してあげませんよ。ハッハハ。」となめくじはもがもが返事をしながらやはりとかげを嘗めつづけました。

「なめくじさん。何だか足が溶けたようですよ。」ととかげはおどろいて云いました。

「ハッハハ。なあに。それほどじゃありません。ハッハハ。」となめくじはやはりもがもが答えました。

「なめくじさん。おなかは何だか熱くなりましたよ。」ととかげは心配して云いました。

「ハッハハ。なあにそれほどじゃありません。ハッハハ。」となめくじはやはりもがもが答えました。

「なめくじさん。からだが半分とけたようですよ。もうよして下さい。」ととかげは泣き声を出しました。

「ハッハハ。なあにそれほどじゃありません。ほんのも少しです。も一分五厘ですよ。ハッハハ。」となめくじが云いました。

それを聞いたとき、とかげはやっと安心しました。丁度心臓がとけたのです。

そこでなめくじはペロリととかげをたべました。そして途方もなく大きくなりました。

あんまり大きくなったので嬉うれしまぎれについあの蜘蛛をからかったのです。

そしてかえって蜘蛛からあざけられて、熱病を起したのです。そればかりではなく、なめくじ

の評判はどうもよくなくなりました。

なめくじはいつでもハッハハと笑って、そしてヘラヘラした声で物を言うけれども、どうも心がよくなくて蜘蛛やなんかよりは却かえって悪いやつだといっているのでみんなが軽べつをはじめました。殊ことに狸はなめくじの話が出るといつでもヘンと笑って云いました。

「なめくじなんてまずいもんさ。ぶま加減は見られたもんじゃない。」

なめくじはこれを聞いて怒って又病気になりました。そのうちに蜘蛛は腐敗して雨で流れてしまいましたので、なめくじも少しせいせいしました。

こんなに自尊心ばかり強くて悪道のナメクジが無事でいられるはずがない。その末路は……。

次の年ある日雨蛙あまがえるがなめくじの立派なおうちへやって参りました。

そして、

「なめくじさん。こんにちは。少し水を吞ませませんか。」と云いました。

なめくじはこの雨蛙もペロリとやりたかったので、思い切っていい声で申しました。

「蛙さん。これはいらつしやい。水なんかいくらでもあげますよ。ちかごろはひでりですけれどもなあと云わばあなたと私は兄弟わたくし。ハッハハ。」そして水がめの所へ連れて行きました。

蛙はどくどくどく水を呑んでからとぼけたような顔をしてしばらくなめくじを見てから云

いました。

「なめくじさん。ひとつすもうをとりましょうか。」

なめくじはうまいと、よろこびました。自分が云おうと思っていたのを蛙の方が云ったのです。こんな弱ったやつならば五へん投げつければ大いペロリとやれる。

「とりましょう。よつしよ。そら。ハツハハ。」かえるはひどく投げつけられました。

「もう一ぺんやりましょう。ハツハハ。よつしよ。そら。ハツハハ。」かえるは又投げつけられました。するとかえるは大へんあわててふところから塩のふくろを出して云いました。

「土俵へ塩をまかなくちゃだめだ。そら。シュウ。」塩がまかれました。

なめくじが云いました。

「かえるさん。こんどはきつと私わたしなんかまけますね。あなたは強いんだもの。ハツハハ。よつしよ。そら。ハツハハ。」蛙はひどく投げつけられました。

そして手足をひろげて青じろい腹を空に向けて死んだようになってしまいました。銀色のなめくじは、すぐペロリとやろうと、そっちへ進みましたがどうしたのか足がうごきません。見るともう足が半分とけています。

「あ、やられた。塩だ。畜生。」となめくじが云いました。

蛙はそれを聞くと、むっくり起きあがってあぐらをかいて、かばんのような大きな口を一ぱいにあけて笑いました。そしてなめくじにおじぎをして云いました。

「いや、さよなら。なめくじさん。とんだことになりましたね。」

なめくじが泣きそうになって、

「蛙さん。さよ……。」と云ったときもう舌がとけました。「雨蛙はひどく笑いながら「さよなら」と云いたかったのでしよう。本当にさよならさよなら。暗い細路ほそみちを通って向うへ行ったら私の胃袋わたしにどうかよろしく云って下さいな。」と云いながら銀色のなめくじをペロリとやりました。

「ハッハハ」「ハッハハ」と親切を装って相撲を仕掛けて食べるのを手口にしていたナメクジは、相撲の土俵には塩を撒まくものだという罠にかかった。

三、顔を洗わない狸

狸は顔を洗いませんでした。

それもわざと洗わなかつたのです。

狸は丁度蜘蛛が林の入口の檜の木に、二銭銅貨位の巣をかけた時、すっかりお腹なかが空すいて一本の松の木によりかかつて目をつぶっていました。すると兎うさぎがやって参りました。

「狸さま。こうひもじくては全く仕方ございません。もう死ぬだけでございます。」
狸がきもののえりを掻かき合せて云いました。

「そうじゃ。みんな往生じゃ。山猫大明神さまのおぼしめしどおりじゃ。な。なまねこ。なまねこ。」
兎も一緒に念猫ねんねこをとなえはじめました。

「なまねこ、なまねこ、なまねこ、なまねこ。」

狸は猫みたいに前足で顔を洗うものらしい。しかし、この狸はわざと洗わずにいる。そして猫に畏敬いけいをもっているらしい。山猫ならば大明神だ。だれもが山猫を畏れ敬うはずだと考えたのか、それを悪業に利用する。「山猫大明神さまのおぼしめしどおりじゃ。な。なまねこ。なまねこ」「な、「な、」と往生を説く手口で相手を食べてしまうのだ。

狸は兎の手をとつてもつと自分の方へ引きよせました。

「なまねこ、なまねこ、みんな山猫さまのおぼしめしどおり、なまねこ。なまねこ。」と云いながら兎の耳をかじりました。兎はびっくりして叫びました。

「あ痛つ。狸さん。ひどいじゃありませんか。」

狸はむにやむにや兎の耳をかみながら、

「なまねこ、なまねこ、みんな山猫さまのおぼしめしどおり。なまねこ。」と云いながら、とうとう兎の両方の耳をたべてしまいました。

兎もそうきいていると、たいへんうれしくてポロポロ涙をこぼして云いました。

「なまねこ、なまねこ。ああありがたい、山猫さま。私わたしのような悪いものでも助かりますなら耳の二つやそこらなんでもございませぬ。なまねこ。」

狸もそら涙をポロポロこぼして

「なまねこ、なまねこ、私わたしのようなあさましいものでも助かりますなら手でも足でもさしあげます。ああありがたい山猫さま。みんなおぼしめしのまま。」と云いながら兎の手をむにゃむにゃ食べました。

兎はますますよろこんで、「ああありがたいや、山猫さま。私わたしのようなくじないものでも助かりますなら手の二本やそこらはいとませぬ。なまねこ、なまねこ。」

狸はもうなみだで身体からだもふやけそうに泣いたふりをしました。

「なまねこ、なまねこ。私わたしのようなどてもかなわぬあさましいものでも、お役にたてて下されますか。ああありがたいや。なまねこなまねこ。おぼしめしのとおり。むにゃむにゃ。」

兎はすっかりなくなつてしまいました。

そこで狸のおなかの中で云いました。

「すっかりだまされた。お前の腹の中はまっくらだ。ああくやしい。」

狸は怒つて云いました。

「やかましい。はやく消化しろ。」

そして狸はポンポコポンポンとはらつづみをうちました。

こうして顔を洗わない狸は山猫大明神教の開祖となり、オオカミさえ救いを求めてやってくる。

それから丁度二ヶ月たちました。ある日、狸は自分の家うちで、例のとおりありがたいごきとうへ御祈禱ごきとうをしていきますと、狼おおかみがお米を三升さげて来て、どうかお説教をねがいますと云いました。

そこで狸は云いました。

「みんな山ねこさまのおぼしめしじゃ。お前がお米を三升もつて来たのも、わしがお前に説教するのもしゃ。山ねこさまはありがたいお方じゃ。兎はおそばに参つて、大臣になられたげな。お前もものの命をとつたことは、五百や千では利きくまいに、早うさんげへ懺悔ざんげさつしやれ。でないと山ねこさまにえらい責苦にあわされますぞい。おお恐ろしや。なまねこ。なまねこ。」

狼はおびえあがつて、きよろきよろしながらたずねました。

「そんならどうしたら助かりますかな。」

狸が云いました。

「わしは山ねこさまのお身代りじゃで、わしの云うとおりさつしやれ。なまねこ。なまねこ。」

「どうしたらようございませう。」と狼があわててききました。狸が云いました。

「それはな。じつとしていさしやれ。な。わしはお前のきばをぬくじゃ。な。お前の目をつぶすじゃ。な。それから。なまねこ、なまねこ、なまねこ。お前のみみちよとを一寸かじるじゃ。なまねこ。」

なまねこ。こらえなされ。お前のあたまをかじるじゃ。むにゃ、むにゃ。なまねこ。堪忍かんにんが大事じゃぞえ。なま……。むにゃむにゃ。お前のあしをたべるじゃ。うまい。なまねこ。むにゃ。むにゃ。おまえのせなかを食うじゃ。うまい。むにゃむにゃむにゃ。」

狼は狸のはらの中で云いました。

「ここはまつくらだ。ああ、ここに兎の骨がある。誰が殺したろう。殺したやつは狸さまにあとでかじられるだろうに。」

狸は無理に「へん。」と笑っていました。

狼は狸の胃袋で先に食われて消化された兎の骨を発見するのだが、「殺したやつは狸さまにかじられるだろうに」と、まだマインドコントロールが解けていない。そんなオオカミを狸は「へん」と笑った。

さて蜘蛛はとけて流れ、なめくじはペロリとやられ、そして狸は病気にかかりました。

それはからだの中に泥や水がたまって、無暗むやみにふくれる病気で、しまいには中に野原や山ができて狸のからだは地球儀のようにまんまるになりました。

そしてまっくろになって、熱にうかされて、

「うう、こわいこわい。おれは地獄行きのマラソンをやったのだ。うう、切ない。」といいなが

らとうとう焦げて死んでしまいました。

*

なるほどそうしてみると三人とも地獄行きのマラソン競争をしていたのです。

この物語は冒頭に、蜘蛛と、銀色のなめくじと、顔を洗ったことのない狸はみんな立派な選手で、実に本気の競争をしていたといい、「一体何の競争をしていたのか」という問いかけがある。その競争とは、地位や見かけを争う威張りっこの競争だった。それは地獄行きのマラソン競争だったということである。

「なるほど、そうだったのか」という結末だが、このストーリーに賢治は満足できなかったようだ。この作品を賢治は「寓話 山猫学校を卒業した三人」に書き改め、さらに手を入れて「寓話 洞熊学校を卒業した三人」に改めた。

「寓話 洞熊学校を卒業した三人」は次のように始まる。

*

赤い手の長い蜘蛛くもと、銀いろのなめくじと、顔を洗ったことのない狸が、いつしよに洞熊学校にはいりました。洞熊先生の教えることは三つでした。

一年生のときは、うさぎと亀のかけくらのことで、も一つは大きいものがいちばん立派だということでした。それから三人はみんな一番になると一生けん命競争しました。一年生のときは、な

めくじと狸がしじゅう遅刻して罰を食つたために蜘蛛が一番になった。なめくじと狸とは泣いて口惜しがった。二年生のときは、洞熊先生が点数の勘定を間違つたために、なめくじが一番になり蜘蛛と狸とは歯ぎしりしてくやしがつた。三年生の試験のときは、あんまりあたりが明るいために洞熊先生が涙をこぼして眼をつぶつてばかりいたものですから、狸は本を見て書きました。そして狸が一番になりました。そこで赤い手長の蜘蛛と、銀いろのなめくじと、それから顔を洗つたことのない狸が、一しよに洞熊学校を卒業しました。三人は上は大へん仲よそうに、洞熊先生を呼んで謝恩会ということをしたりこんどはじぶんらの離別会ということをやつたりしましたけれども、お互いにみな腹のなかでは、へん、あいつらに何ができるもんか、これから誰がいちばん大きくえらくなるか見ていると、そのことばかり考えておりました。さて会も済んで三人はめいめいじぶんのうちに帰つていよいよ習つたことをじぶんできんとやることがになりました。洞熊先生の方もこんどはどぶ鼠をつかまえて学校に入れようと毎日追いかけて居りました。

ちようどそのときはかたくりの花の咲くころで、たくさんのたくさんの眼の碧い蜂の仲間が、日光のなかをぶんぶんぶん飛び交いながら、一つ一つの小さな桃いろの花に挨拶して蜜や香料を貰つたり、そのお札に黄金いろをした円い花粉をほかの花のところへ運んでやつたり、あるいは新しい木の芽からいらなくなつた蠟を集めて六角形の巣を築いたりもういそがしくにぎやかな春の入口になつていました。

*

以下、「一、蜘蛛はどうしたか。」「二、銀色のなめくぢはどうしたか。」「三、顔を洗わない狸。」の3つの章がある。その内容は「蜘蛛となめくじと狸」とほぼ同じだが、結末は大きく改変されている。顔を洗わない狸に米を供えていた狼が食われてしまつて狸の胃の中に落ちてしまつたところから掲載する。

*

「ここはまつくらだ。ああ、ここに兎の骨がある。誰が殺したろう。殺したやつはあとで狸に説教されながらかじられるだろうぜ。」

狸はやかましいやかましい蓋をしてやらう。と云いながら狼の持つて来た粿を三升風呂敷のまま呑みました。

ところが狸は次の日からどうもからだの工合がわるくなつた。どういふわけか非常に腹が痛くて、のどのところへちくちく刺さるものがある。

はじめは水を呑んだりしてごまかしていたけれども一日一日それが烈しくなつてきてもう居ても立つてもいられなくなつた。

とうとう狼をたべてから二十五日めに狸はからださがゴム風船のようにふくらんでそれからポロポロと鳴つて裂けてしまつた。

林中のけだものはびっくりして集つて来た。見ると狸のからだの中は稲の葉でいっぱいでした。あの狼の下げて来た粿が芽を出してだんだん大きくなつたのだ。

洞熊先生も少し遅れて来て見ました。そしてああ三人とも賢いいいこどもらだったのにじつに残念なことをしたと云いながら大きなあくびをしました。

このときはもう冬のはじまりであの眼の碧い蜂の群はもうみんなめいめいの蠟でこさへた六角形の巣にはひつて次の春の夢を見ながらしずかに睡って居りました。

*

「寓話 洞熊学校を卒業した三人」は「ちようどそのときはかたくりの花の咲くところで、たくさんのおたくさんの眼の碧い蜂の仲間が（中略）蠟を集めて六角形の巣を築いたりもういそがしくにぎやかな春の入口になっていました」という早春から始まり、「もう冬のはじまりであの眼の碧い蜂の群はもうみんなめいめいの蠟でこさへた六角形の巣にはひつて次の春の夢を見ながらしずかに睡って居りました」という初冬で終わる。

この物語のフレームは童話「やまなし」の「小さな谷川の底を写した二枚の青い幻燈」の話とよく似ている。その二枚の青い幻燈は、初夏の五月と初冬の十二月の情景である。

その谷川の水の中で、かふかふわらっていたクラムボンは殺された。おそらく大きな魚に食われたのだろう。それだけでなく、「水中を行ったり来たりして何かをとつてる魚も、いきなり飛び込んできたカワセミの嘴のようなものにさらわれてしまった」。食べたり食べられたりする恐ろしい世界であるが、日光の黄金が夢のように「降って来るし、流れてきたヤマナシの実が自然に発酵しておいしい酒になるところでもある。

そして十二月、「親子の蟹は三疋自分等の穴に帰って行きます。／波はいよいよ青じろい焰をゆらゆらとあげました、それは又金剛石の粉をはいているようでした。」というシーンで終わる。

どんなに恐ろしい世界にも日光の黄金や金剛石の粉が降りそそぐ。詩「春と修羅」の言葉では「のばらのやぶや腐植の湿地／いちめんのいちめんの詔曲模様」の中でも「正午の管楽よりもしげく／琥珀のかけらがそそぐ」し「れいろうの天の海には／聖玻璃の風」が行き交う。

「寓話 洞熊学校を卒業した三人」では、みんなが地獄行きの競争をしても、眼の碧い蜂の群は、みんなで巣をつくり、厳しい冬には次の春の夢を見ながらしずかに睡っているのである。

このように〈悪〉をも聖なるものに包む世界は悉有仏性（だれにも仏性がある）を旨とする日本の仏教全体に通じるものだが、とりわけ法華経によるところが大きい。それについては次の「宮沢賢治の文学と信仰」で述べる。

おわりに 宮沢賢治の文学と信仰

賢治の法華信仰

宮沢賢治は明治29年（1896）に花巻の商家の長男として生まれた。父の政次郎は銀行や鉄道会社に出資するなど近代資本家の才覚をもつ人だったが、生家は代々、浄土真宗（正確には真宗大谷派）の門徒で、父母とも篤信の人だった。

しかし、賢治は生家が質商を営んでいることをひどく気に病んでいた。貧しい農民などから質草をとって利子つきのお金を貸す行為が許せなかったようだ。暮らしに困っている人がいるなら、お金でも何でもやってしまいたい。そんなことを考える性分なのだ。

賢治は18歳のころから法華経を信仰するようになった。22歳の大正7年（1918）の童話「蜘蛛となめくじと狸」を書いたころは賢治の法華信仰への傾きが大きくなった時期である。友人の保阪嘉内ほさかかかないあて同年6月20日前後の手紙（「新校本宮澤賢治全集」書簡74）には「私の家には一つの信仰へ真宗の信仰」が満ちてゐます。私はけれどもその信仰をあきたらず思ひます。勿体もったいのない申し分ながらこの様な信仰はみんなの中へ生家の家族」に居る間だけです」と言っている。ま

た、同6月27日付けの手紙（書簡76）には「保阪さん。諸共に深心に立ち上り、敬心を以てかの赤い経巻を手にとり静にその方便品、寿命品を読み奉らうではありませんか。南無妙法蓮華經 南無妙法蓮華經」と書いている。

この手紙に「赤い経巻」というのは島地大等の『漢和対照 妙法蓮華經』（1914年刊）のことらしい。経巻といっても普通の造本なのだが、表紙が赤いのである。賢治は十八歳のころにそれを読んで感銘をうけた。それが法華經に帰依するきっかけになったという。

それが真宗の篤信者だった父・政次郎との対立につながる。激しく口論したということだが、浄土信仰か法華信仰かという教義をめぐる対立がそれほど激しかったとは思われない。『漢和対照 妙法蓮華經』は父が同信の知人、高橋勘太郎から贈られた本だったし、そもそも著者の島地大等は浄土真宗の学僧である。また後年、日蓮宗寺院（日蓮宗花巻教会所、現在の身照寺）の建立運動がおこったとき、賢治は母方の叔父、宮沢恒治の求めに応えて「法華堂建立勸進文」を書いた。

恒治は宮沢一族の自家の当主で、宗旨はもちろん真宗大谷派である。その宮沢自家の当主が先頭に立って日蓮宗寺院の建立運動をおこしたのだから、浄土信仰か法華信仰かの対立などはない。ただし賢治は、国柱会に入会した大正9年（1920）の秋から暮れにかけて相当に過激な行動に出た。「南無妙法蓮華經」と声高に唱えながら夜の町を歩いたり、むやみに法論を挑んだりしたということである。父の政次郎は「困ったことをするものだ」と歎いた。母イチも心を痛め

て高橋勘太郎に相談したところ、「それは少しも差し支えありません。(中略)無量寿経も法華経も)みな釈尊の教え」と言われて安心したという(宮沢清六「兄賢治の生涯」)。

翌年1月に無断上京した賢治は、上野に近い鶯谷にあった国柱会本部を訪れて「私は昨年御入会を許されました岩手県の宮沢と申すものでございますが今度家の帰正きせいを願ふ為にわかに俄にこちらに参りました」(書簡185/関徳弥あて)と告げたという。

家の帰正、すなわち生家の転宗を賢治は父に迫つたのだ。父子の対立が教義論争であるうちは対立しても言い争いとどまるが、転宗となれば話は別だ。宮沢家の墓は菩提寺の真宗大谷派あ安浄寺の境内にあつたので、それを移転しなければならぬ。家の仏壇じょうども取りかえなければならぬし、盆や法事のしきたりも変わる。信仰がどうのというより、そうした實際のくさぐさが実によつかいだ。だから、息子が転宗を言い出したりしたら、当主たる父親が真っ赤になつて怒らないほうがおかしい。信仰がどうのという問題ではない。

そういうことがあつたけれど、大正10年1月に、いざ無断で上京してみると、強硬な法華信仰はやわらいだ。その年4月には父と一緒に関西方面に旅行し、8月には花巻に戻る。そのころには過激な言動はころりとなくなつた。賢治は生涯、国柱会の会員であつたけれど、誰かに強く入信を勧めることもなくなつた。

賢治が童話を数多く書くようになったのも大正10年に上京してからだつた。その作品にはキリスト教色の強いものもあるし土地の風習をふまえたものもあるのだが、賢治は詩や童話の文の底

に秘かに沈めおくように、その信仰を織りこんでいる。その童話について賢治は、昭和8年9月21日に病没する前日に「ありがたい仏さんの教えを、一生懸命に書いたものだんすじゃ。だから、いつかはきつと、みんな、よろこんで読むようになるんすじゃ」と母に話したことがあったという（『新校本宮澤賢治全集』「年譜」昭和八年九月二十日）。

賢治の反浄土

しかし、まだ父と激しく対立していた大正10年に書かれた「蜘蛛となめくじと狸」をはじめ、その作品には過激に浄土信仰を否定したものがある。

狸は「なまねこ、なまねこ、みんな山猫さまのおぼしめしどおり」とインチキな「念猫」で兎や狼をマインドコントロールにかけ、食べてしまう。その結果、体に泥や水がたまつてふくれあがり、熱にうなされながら「うう、こわいこわい。おれは地獄行きのマラソンをやったのだ」と気づいたときには、もう遅い。「うう、切ない」と言いながら、とうとう焦げて死んでしまった。蜘蛛もなめくじも狸も、「三人とも地獄行きのマラソン競争をしていた」ということだが、その競争で一等賞をとり、いちばん深い地獄に落ちたのは狸だ。

「真言亡国・禅天魔・念仏無間・律国賊」という言葉がある。日蓮の他宗批判を「四箇格言」とよばれる4項目で表した言葉だ。そこに「念仏無間」というのは念仏して阿弥陀仏にすがる者

は無間地獄（いちばん罪深い者が行く地獄）に墜おとされるということである。

狸がさらに罪深いのは、念仏を「念猫」と称し、「南無阿弥陀仏」を「なまねこ、なまねこ」ともじつて言い換えていることだ。それは罪深いことでキリスト教の教会で「アーメン」を「ラーメン」、イスラム教のモスクで「アッラー」を「アララー」などと茶化したら、生きて出てこれられないかもしれない。たとえ信仰を異にしても、神仏を畏おそれる人ならそんな冒瀆ぼうとくはしない。仏教では謗法ぼうぼうの大罪である。賢治も、前掲の保阪あて書簡74では、自分の家の信仰にあきたらないことを「勿体ない申し分ながら」と言っている。しかし、この作品には、そうした畏れを超えて賢治の過激な念仏批判が込められている。

もう一編、過激な反浄土の作品は童話「二十六夜」だ。旧暦六月二十四日から二十六日にかけて北上川のほとりの森で梟ふくみづたちが夜に念仏講を開く。大僧正だいそうじょうか僧正そうじという偉そうな梟の坊さんが「南無疾翔なむしつしやう大力たいりき、南無疾翔大力」と念仏もどきをとなえ、蓮如ねんごの御文ごぶん（御文章）と浄土經典『観無量寿經』のパロディみたいな説法をする。その説法を熱心に聴聞ちやうもんしていた子梟の穂吉ほきちは、人間の子どもにつかまり、二本の脚あしをへし折られて捨てられた。それでも説法を聞きたいと願う穂吉は、二十六夜の念仏の夜、「南無疾翔大力、南無疾翔大力」の声を聞きながら息を引き取った。

その念仏講の集まりには、けんかをしたり、ふざけて騒いでばかりいる二疋の子どもの梟がいて、説教にあきあきして逃げだし、実相寺じつそうじの森のほうに遊びに行つてしまう。その子らのほうが罰当たりのようなが、諸法実相しよぼうじつじやう（世界の真実）を説く法華経を思わせる実相寺の森に行つた梟は

なんともない。穂吉が何も悪いことをしていないのにひどい目にあつたのは、罪深いエセ念仏の説法を熱心に聞いていたことが災いしたというほかない。

ただ、この「二十六夜」の物語では、北上川に沿って走る夜汽車の音がいつも遠くにごとんと響いている。そして、澄み切った桔梗色の空に黄金いろの二十六夜の月が静かにかかり、穂吉がかすかに笑ったまま息がなくなつたとき、汽車の音がまた聞こえて来た。不幸な穂吉は、まるで銀河鉄道の夜の星空に旅立っていったかのように物語は静かに結ばれている。

山川草木悉皆成仏

初期童話「蜘蛛となめくじと狸」は「三人とも地獄行きのマラソン競争をしていたのです」と結ばれ、救いは乏しい。そのため、前述したように賢治はこの作品を「洞熊学校を卒業した三人」に書き改めた。その結びは「もう冬のはじまりであの眼の碧い蜂の群はもうみんなめいめいの蠟でこさえた六角形の巣にはいつて次の春の夢を見ながらしずかに睡って居りました」となり、大きな自然の運行の中に静かにつつまれる。

殺し殺される生き物たちの世界にも光が金剛石の粉をはくように降る。このような記述に法華経「如来寿量品」の偈の一節を思い浮かべることができる。

衆生劫尽きて大火に焼かると見る時も
我が此の土は安穩にして天人常に充滿せり
園林諸の堂閣、種々の宝をもつて莊嚴し
宝樹花果多くして衆生の遊樂する所なり

〔意訳〕

この世に苦しみは多く大火が燃え上がっているように思われるときでも、
ここは真実には平安な仏の国であり、天の神々や善き人々が満ちている。

ここは、いろいろな宝物で飾られた建物が建ち並び、
美しい木々が花や果実を多くつけて、生きとし生けるものが幸福に暮らすところである。

前述したように賢治は自分の童話について母に「ありがたい仏さんの教えを一生懸命に書いたものだんすじゃ」と語ったという。そうであれば、たとえ残酷な物語でも、コミカルでふざけた話でも、どこかに救いが込められているはずだ。静かな冬の訪れで終わる「洞熊学校を卒業した三人」のエンディングには、日本の仏教でよく言われる「山川草木悉皆成仏（山も川も草木もみな仏）」という祈りが込められているように思われる。

同様のエンディングは、食うものと食われるものの幻想的な童話「やまなし」など、賢治の作品によく見られるパターンである。



地人館 E-books デモ版

*ページのレイアウト等は電子版と異なります。

大角 修 (おおかど おさむ)

1949年 兵庫県姫路市生まれ。東北大学文学部宗教学科卒。

(旬)地人館代表。仏教・日本文化史などを中心に編集・執筆活動を行う。

宮沢賢治研究会『賢治研究』編集委員

著書

『宮沢賢治の誕生』(中央公論新社)『イーハトーブ悪人列伝』(勉誠出版社)『仏教百人一首 万葉の歌人から宮沢賢治まで』(法藏館)『全品現代語訳 法華経』『全文現代語訳 浄土三部経』(角川ソフィア文庫)『法華経の事典 信仰・歴史・文学』(春秋社)『日本仏教の基本経典』(角川選書)『新日本の歴史』全5巻(小峰書店)など多数

みやざわけんかじ どう わ せん 宮沢賢治コミカル童話選 II

編著 おおかど おさむ
大角 修

初版発行 2021年4月2日

発行 ちじんかん
地人館

〒116-0014 東京都荒川区東日暮里6-56-6 長戸ビル3階

Tel 03-6806-7937 Fax03-6806-7937

<http://chijinkan.com>

©2021 Osamu Okado